ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.13 No.1 January 2012

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

1

CONTENTS

- 巻頭言
  一年を実のある年に
  ／深谷忠一 1
- 天理教海外伝道の資料（23）
  満州伝道関連史料⑦
  ／深川治道 2
- 天理教伝道史の諸相（1）
  天理教伝道史概観
  ／早田一郎 3
- 「いのち」をつなぐ―生死の現象（1）
  はじめに
  ／堀内みどり 4
- ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の民族誌学（34）
  ハワイ人キリスト教徒とカフナ
  ／井上昭洋 6
- 福島第1原発の放射能漏れ事故がもたらした想定外？の波紋（1）
  なぜ放射能漏れ事故は起きたのか
  ／佐藤孝則 8
- 天理スポーツ（20）
  天理スポーツ シンポジウム⑩
  ／難波真理 10
- 平成23年度公開教学講座
  「現代社会と天理教」（2）
  第8講：選択と不選択―教えとともに生きる道
  ／深川治道 11
- English Summary 12
- おやさと研究所ニュース 13

  日本生命倫理学会第23回年次大会に参加／第2回「宗教と環境シンポジウム」でパネル発表／第16回「国際協力関係者の集い」に参加／明治学院大学シンポジウム「西洋美術とジェンダー―視ることの制度」に参加／第243回研究報告会「天理教ハワイ・コンベンション2011を振り返って」／諸井慶徳先生50年祭記念公開教学シンポジウム／平成24年度公開教学講座開催のお知らせ／連載執筆のねらい

巻頭言

一年を実のある年に

おやさと研究所長　深谷忠一　*Chuichi Fukaya*

謹　賀　新　年

『グローカル天理』を愛読くださる皆様方には、恙なく新年をお迎えになったことと拝察いたします。

さて、昔流に申しますと、新年を迎えるのは歳を一つとるということですが、筆者は、若い時には、長寿は信仰の証であって、長生きするのは疑いなく善であると考えていました。

30年以上も前のことですが、においがけをしたアメリカ人の大学の先生から、「天理市に住んでいる人の平均寿命は、日本の他の町に比べて長いですか？」と聞かれたことがあります。何故そんな質問をするのかと問い返しますと、「天理という聖なる町には、“おさづけ”というヒーリングパワーを持った人が沢山いる。その上“憩の家”という東洋一の病院があるのだから、住民は病気になってもすぐに救かって、皆さん長生きしているでしょう？」というのです。

それで、それも一理だと思ってその時の天理市の平均寿命を調べてみました。その結果は？　何と…天理市の平均寿命は男女とも日本全体のそれとピッタリ同じだったのです。これでは自慢はできないと、彼には結果を伝えませんでしたが、自分自身を納得させるために、天理市の平均寿命が特別に長くない理由を種々考えてみました。“教祖は「村方早くにたすけたい」とおっしゃったけれども、ご在世当時から地元では信仰に反対する人の方がむしろ多かった。現在でも天理市民全てが信者ではないのだから、平均寿命が他と同じでも何ら不思議ではない”とか、“憩の家の病院には、他の病院で手に負えなくなった多くの重患・重傷患者が運び込まれてくる。だから、救からない人も多くなる。憩の家があるから他より長生きする人が多いだろうというのは逆である”などと種々原因を考えてはみましたが、何れの言い分も“言い訳がましいな”という感が拭いきれませんでした。

それで、その後筆者が会長に就任した教会の信者さんたちには、「皆さんはどんなことがあっても元気で長生きして、教内の平均寿命を延ばすことに寄与してください。10人も20人もの100歳以上の人が元気にておどりを踊っていれば、黙っていても大勢の人がこの教会に寄ってきますからね」と冗談半分、本気半分に言っておりました。

しかるに、ここ最近になって自分自身が老いを意識しはじめてからは、「100歳以上生きろと言われるのもしんどいなあ…」と思うようになりました。身近な同世代や年下の人たちが毎年一人二人と欠けるのを経験し、また、自らの知力・体力の限界もおぼろげながらに分るようになりますと、「長生きしろ！」とは安易には言えないようになり、これまでの主張に反して“長生きするだけが人生ではない”という言い訳も考えるようになっているのです。

たとえば、立教以前のことですが、教祖が、隣家の子供の病気平癒を、ご自身とお子様二人の寿命を身代わりにして願われたことがあります。その結果、隣家の人は72歳の長命を頂かれましたが、お子様お二人は幼くして出直されました。

また、東本大教会初代会長中川よし先生は54歳で出直されましたが、その5～6年前にお側の人に、「私がもし病気をしても、決して神様にお願いをしてはいけない。私は自分の生命を切りつぎ切りつぎお願いをしてきて沢山の人にたすかって頂いた。勘定したら私はもう350歳以上になっている。そんなのが厚かましく生きているんだからね」とおっしゃったと伝えられます。

この教祖のお子様たちの短いいのち、中川先生の54年のいのちなどを考えると、人の一生の値打ちは、ただ寿命の長さだけでは決まらないとも申せましょう。

一休禅師という人は

門松は冥土の旅の一里塚
　　めでたくもありめでたくもなし

とよんでいますが、この一年が“馬齢を重ねただけの年”にならぬよう、少しでも世界だすけに寄与できたと思える年になるように、心して通らせて頂きたいと思う次第です。今年も皆様方の変らぬお心よせをいただきますようお願い申し上げます。